

認知症についてのお悩みごとにと
うきょうオレンジドクターが寄り添います。

とうきょう オレンジ ドクター

地域にお住いの、認知症のある方や認知症が心配な方を、地域包括支援センターなどの関係機関と連携して支えることのできる認知症サポート医を、東京都独自の制度で“とうきょうオレンジドクター”に認定します。

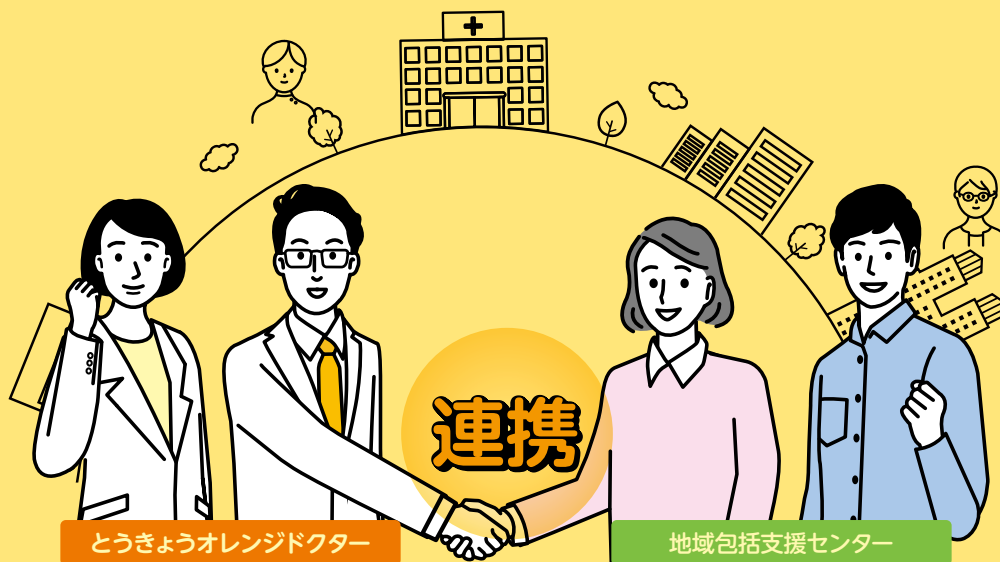
「とうきょうオレンジドクター」



東京都



公益社団法人 東京都医師会



とうきょうオレンジドクターが地域包括支援センターと行うこと！

- ・ 認知症のある方への診療及び入退院支援
- ・ 地域包括支援センターが主催する認知症関連の会議体への参加
- ・ 地域包括支援センターの相談医
- ・ 認知症カフェ等での認知症のある方と家族介護者等を対象とした取組への参加
- ・ 地域住民向け講演会や多職種向け等研修等への協力や講師としての参加
- ・ 運転免許更新に係る診断書作成
- ・ 成年後見に係る診断書作成

とうきょうオレンジドクターの認定基準 ※5年更新

都内に勤務し、以下の要件をすべて満たす認知症サポート医

- ① 認知症診療歴5年以上
- ② 診療件数10名以上/月または在宅医療件数3名以上/月
- ③ 認知症サポート医フォローアップ研修への参加
(申請年度の前々年度4月1日から申請までに3回以上)

- ④ 地域包括支援センターと合意書を交わしている
- ⑤ 以下すべてに対応可能および「とうきょう認知症ナビ」公表への同意
 - ・ 地域包括支援センターからの相談対応
 - ・ 初期集中支援チームへの参加
 - ・ 認知症検診への参加
 - ・ 認知症カフェへの参加
 - ・ 研修講師としての協力

東京都医師会 理事 西田伸一

地域で孤立しがちな独居や二人暮らしの認知症のある方に対し、地域包括支援センターと認知症サポート医の先生方が協働して早期からの支援ができるよう、「とうきょうオレンジドクター」の活動が始まっています。是非とも地域包括支援センターと定期的な情報交換の機会をつくっていただき、支援を必要とする地域住民のためにお力をお貸しください。

先生方のご活躍を心から期待しています。

東京都福祉局

東京都では、地域包括支援センター等と連携して積極的に活動していただく認知症サポート医の方を「とうきょうオレンジドクター」として認定しています。また、とうきょうオレンジドクターの方と様々な連携に取り組む区市町村を支援しています。

認知症のあるご本人やご家族を地域で支えるため、ぜひ、皆様のご経験を「とうきょうオレンジドクター」として活かしてください。

皆様のご申請をお待ちしております。

東京都は、公益社団法人東京都医師会の協力を得て、とうきょうオレンジドクターの普及啓発を進めています。

問合せ先

東京都医師会 事業部 医療介護福祉課 TEL : 03-3294-8835 FAX : 03-3292-7097 E-mail : iryoufukushi@tokyo.med.or.jp
東京都 福祉局 高齢者施策推進部 在宅支援課 TEL : 03-5320-4276 FAX : 03-5388-1395



東京都が認定する認知症サポート医

地域で連携 ～つながるこ

Profile

たかせクリニック理事長

高瀬義昌先生

信州大学医学部卒業。東京医科大学大学院修了。麻酔科、小児科を経て、包括的医療・日本風の家医学・家族療法を模索し、平成16年東京都大田区に在宅医療を中心とした「たかせクリニック」を開業。現在、在宅医療における認知症のスペシャリストとして厚生労働省の各事業や東京都・大田区の地域包括ケア、介護関連事業の委員などを数多く務め、在宅医療の発展に日々邁進している。

時代とともに進化する地域医療を

—— とうきょうオレンジドクターになった動機は？

高瀬 私は、「医者ができることは医療だけ」という限定的な考え方ではなく、より視野を広げた「生活支援」という観点がないと認知症対策はままならないということ、2000年頃から認知症のある方とその家族を診ている中で気がついていました。2008

年には、「認知症の人が認知症の人を介護しているという現実がある」という報告を、「認認介護」という言葉を使い発表し、同年7月の朝日新聞に掲載されたこともあり、地域包括支援センター（以下、地域包括）やケアマネジャーと密に連携を取らないと、特に認知症や高齢者が発症する精神症状に対しては、医療だけでは対応が難しいと当たり前と感じていた者として、オレンジドクターになったのは「使命感」といえばそうかもしれません。

—— とうきょうオレンジドクターの活動内容は？

高瀬 地域包括から依頼があれば、ゴミ屋敷にもスクーターで駆けつけたり、独居の認知症のある方の入院手続きで病院まで行ったこともあります。即対応が求められる案件は得意分野です！ また、2004年9月に承認された

「レキサルティ®」の使用方法など、薬の情報についても、かかりつけ医や地域包括へフィードバックできるよう頑張っているところです。

オレンジドクターの考え方は、かなり先進的だと感じています。「地域包括ケアシステム」を実現するには、時間と努力が必要ですし、認知症のある方の増加に対応するため、私たちはトライ＆エラーを重ねながらも、もたもたはできないでしょう。

—— 地域包括支援センターとの連携について

高瀬 独居の認知症のある方は、すでに地域で顕在化しているものの、情報が十分に共有されていない現状があります。医師に対して多少遠慮があるのかもしれませんが、そうした壁をできるだけ低くしていく必要があります。医師は日頃から個人情報保護にきちんと取り組んでいますので、医師には安心して情報を伝えてほしいですね。

例えば先ほどの新しい薬の知識や使い方を地域包括や介護職の皆さんと共有することで、BPSDが重篤になった状態で報告が上がるのではなく、軽い状態で予防的に対応できるような状況が生まれてくると思います。そうした意味でも、地域包括と連携するオレンジドクターの制度は、タイムリーで大事なものだといえるでしょう。

—— 今後、どのようなことを目指していくのか

高瀬 医療と介護が、お互いにコミュニケーションを取りながら勉強していくことが大切です。さらに、医療と介護の連携で薬の量を減らしていく「ケアと薬の最適化」もこれから目指すべき道だと思います。そのためには、在宅医療の現場で、ご家族の協力のもと、多職種での「チーム・モニタリング」による協働と、薬の副作用や使い方などの教育活動とともに情報収集のシステムをつくっていくこともこれからの方向性だと思います。

おそらく、オレンジドクターの制度は、地域包括ケアシステムをより進化させ、完成を目指すための大事なプロセスであり、初めの一歩になると考えています。私も、大学では教えてくれない地域医療の面白さを、若い世代の先生方に伝え、多職種における仲間づくりをより一所懸命に取り組んでいきたいと思っています。



大田区地域包括支援センター六郷



緊急のケースでも迅速にご訪問いただき、必要に応じて入院の手配までしていただけるため、とても助かっております。

また、認知症カフェでは講師としてご登壇もいただいております。認知症について、時折笑いを誘いつつも、最新の情報を交えたお話で、地域の皆さまからも大変好評をいただいております。

「とうきょうオレンジドクター」に聞きました！

とで見えてくる認知症ケア

Profile

みわ内科クリニック医師
医療法人社団エキップ理事長
三輪隆子先生

認定内科医・神経内科専門医・身体障害指定医
信州大学医学部卒業。佐久総合病院、東京都立神経病院、狭山神経内科病院等で神経疾患、難病の診療に従事。平成7年国立身体障害者リハビリテーション病院神経内科医長。平成19年「みわ内科クリニック」開院。令和5年から西東京市医師会会長。

地域とともに歩んだ認知症診療20年

—— とうきょうオレンジドクターになった動機は？

三輪 神経内科医、認知症サポート医として、20年以上にわたり認知症のある方の診療に携わってきた経験から、地域での支えの重要性を強く感じてきました。そうした中で、地域包括支援センター（以下、地域包括）との連携が制度として確立される「とうきょうオレンジドクター」を知りました。この制度を知ったとき、「これまで地域で取り組んできたことは間違っていなかったこと」、そして「その活動をきちんと評価してもらえたこと」を実感し、自分で言うのも恐縮ですが、「今の自分こそオレンジドクターにふさわしい」と思い申請しました。

—— とうきょうオレンジドクターの活動内容は？

三輪 これまでと同じように、認知症のある方を中心に、医師と地域包括が「紹介」や「相談」を通じて「連携」していく体制に変わりはありません。診療以外の場面でも、認知症のあるご本人やご家族と関わる「場」を持ちたいという思いから、10年ほど前に地域包括の方と協力して「オレンジカフェ」を立ち上げました。現在では市内10か所以上に広がっています。

地域包括の広い人脈に加え、認知症サポーターでもあるボランティアの方の協力もあり、専門職だけでなく地域の中での「多職種連携」が、オレンジカフェの原動力となっています。

—— 地域包括支援センターとの連携について

三輪 新型コロナによる苦しい時期を経て、地域医療におけるさらなる連携強化の重要性を改めて実感しています。西東京市では、MCS（メディカルケアステーション）※をコミュニケーションツールとして導入していますが、今後はより一層有効に活用できるよう、努めていきたいと考えています。

そのためには、「敷居が高い」と言われがちな医師側から、一歩踏み出して積極的にアプローチする姿勢が重要です。自ら垣根を越えて「何かお困りのことはありませんか？」と声をかける、“御用聞き”の姿勢を実践してい

たいと思っています。

西東京市の地域医療に関する取組

—— 今後、どのようなことを目指していくのか

三輪 令和7年度から東京都では「認知症サポート医地域連携促進事業」が拡充され、区市町村への補助が新設されています。今後はこの事業を活用し、研修や講演会を通して、日常的な連携をさらに広げていきたいと考えています。

また、西東京市内にある8か所の地域包括それぞれに、オレンジドクターを配置することを目標としています。さらに、若い世代の先生方をオレンジドクターとして積極的に勧誘し、地域の担い手になっていただくことで、円滑な世代交代を図ることが重要です。同時に、地域包括や地域のボランティアなど、あらゆる分野において次の世代へいかにつなげていくことも、大きな課題だと感じています。

将来的には「オレンジドクターの会」を立ち上げ、西東京市内で情報交換の場を設けられればと思っています。私自身も、あと10年はこの活動に力を尽くすべく頑張ります。

※MCS：全国の医療介護現場で利用できる地域包括ケア・多職種連携のためのコミュニケーションツール

● 栄町地域包括支援センター



先生とは、まだ西東京市にオレンジカフェがなかった時に、地域での認知症支援に関するコミュニティづくりの重要性について意気投合し、記念すべき第1号のオレンジカフェを立ち上げた経緯があります。

今後は、早期発見の仕組みづくりや幅広い世代への情報発信等の活動を推進していきたいと思いますので、今後もよろしくお願いいたします。また、多くのオレンジドクターが地域に出ていただけることを期待しています。

